

カーライル博物館

夏目漱石

青空文庫

公園の片隅に通りがかりの人を相手に演説をしている者がある。向うから来た釜形かまがたの尖とがつた帽子を被かずいて古ぼけた外套がいとうを猫背ねこぜに着た爺さんじいがそこへ歩みを佇とどめて演説者を見る。演説者はぴたりと演説をやめてつかつかとこの村夫子そんぶうしのたたずめる前に出て来る。二人の視線がひたと行き当る。演説者は濁りたる田舎調子いなかちようしにて御前はカーライルじゃないかと問う。いかにもわしはカーライルじゃと村夫子が答える。チエルシーの哲人セージと人が言いはふのは御前の事かと問う。なるほど世間ではわしの事をチエルシーの哲人セージと云うようじゃ。セージと云うは鳥の名だに、人間のセージとは珍らしいなと演説者はからからと笑う。村夫子はなるほど猫も杓子しやくしも同じ人間じやのにことさらに哲人セージなどと異名いみようをつけるのは、あれは鳥じやと渾名あだなすると同じようなものなのう。人間はやはり当り前の人間で善よかりそうなものなのに。と答えてこれもからからと笑う。

余は晚餐前に公園を散歩するたびに川縁かわべりの椅子いすに腰を卸して向側を眺ながめる。倫敦ロンドンに固有なる濃霧はことに岸边に多い。余が桜の杖に頤あごを支さえて真正面を見ていると、遙はるかに対岸おうらいの往来はを這い廻る霧の影は次第に濃くなつて五階立だての町続きの下からぜんぜんこの揺曳たなびくものの裏うちに薄れ去つて来る。しまいには遠き未来の世を眼前に引き出いだしたるように

窺然たる空の中にとりとめのつかぬ鳶色の影が残る。その時この鳶色の奥にぼたりぼたりと鈍き光りが滴るように見え初める。三層四層五層共に瓦斯を点じたのである。余は桜の杖をついて下宿の方へ帰る。帰る時必ずカーライルと演説使いの話しを思いだす。かの溟濛たる瓦斯の霧に混ざる所が往時この村夫子の住んでおったチエルシーなのである。

カーライルはおらぬ。演説者も死んだであろう。しかしチエルシーは以前のごとく存在している。否彼の多年住み古した家屋敷さえ今なお儼然と保存せられてある。千七百八年チエイン・ロウが出来てより以来幾多の主人を迎え幾多の主人を送ったかは知らぬがとにかく今日まで昔のままで残っている。カーライルの歿後は有志家の発起で彼の生前使用したる器物調度図書典籍を蒐めてこれを各室に按排し好事のものにはいつでも縦覧せしむる便宜さえ謀られた。

文学者でチエルシーに縁故のあるものを挙げると昔しはトマス・モア、下つてスモレッツト、なお下つてカーライルと同時代にはリ・ハントなどがもつとも著名である。ハントの家はカーライルの直近傍で、現にカーライルがこの家に引き移った晩尋ねて来たという事がカーライルの記録に書いてある。またハントがカーライルの細君にシエレーの塑像を贈

つたという事も知れている。このほかにエリオットのおった家とロセツチの住んだ邸がすぐ傍の川端に向いた通りにある。しかしこれらは皆すでに代がかわって現に人が這入っているから見物は出来ぬ。ただカーライルの旧廬のみは六ペンスを払えば何人でもまた何時でも随意に観覧が出来る。

チエイン・ローは河岸端の往来を南に折れる小路でカーライルの家はその右側の中頃に在る。番地は二十四番地だ。

毎日のように川を隔てて霧の中にチエルシーを眺めた余はある朝ついに橋を渡つてその有名なる庵りを叩いた。

庵りというと物寂びた感じがある。少なくとも瀟洒とか風流とかいう念と伴う。しかしカーライルの庵はそんな脂っこい華奢なものではない。往来から直ちに戸が敲けるほどの道傍に建てられた四階造の真四角な家である。

出張った所も引き込んだ所もないのべつに真直に立っている。まるで大製造場の煙突の根本を切つてきてこれに天井を張つて窓をつけたように見える。

これが彼が北の田舎から始めて倫敦へ出て来て探しに探し抜いて漸々の事で探し宛てた家である。彼は西を探し南を探しハンプステッドの北まで探してついに恰好の家を

探し出す事が出来ず、最後にチエイン・ローへ来てこの家を見てもまだすぐに取きめるほどの勇氣はなかつたのである。四千万の愚物ぐぶつと天下のしを罵ののつた彼も住家すみかには閉口したと見え、その愚物の中に当然勘定せらるべき妻君へ向けて委細を報知してその意向を確めた。細君の答に「御申越おきねがいたくもの借家しゃくやは二軒共不都合もなき様被ぞんぜられ存候ぞろせつえば私倫敦へ上のぼり候迄そろまで双方共御明け置おきねがいたくも願度もとめ若し又それ迄に取極め候必要相生じ候節そろせつは御一存にて如何いかとも御取計らい被下度候とあつた。カーライルは書物の上でこそ自分独りわかつたような事をいうが、家をきめるには細君の助けに依らなくては駄目と覺悟をしたものと見えて、夫人の上京するまで手を束ねて待つていた。四五日しごんちすると夫人が来る。そこで今度は二人してまた東西南北を馳かけ廻つた揚句の果はてやはりチエイン・ローが善いという事になった。兩人ふたりがここに引き越したのは千八百三十四年の六月十日で、引越の途中に下女の持つていたカナリヤが籠かごの中で囀さえずつたという事まで知れている。夫人がこの家を撰えらんだのは大に氣に入つたものかほかに相当なのがなくてやむをえなんだのか、いずれにもせよこの煙突のごとく四角な家は年に三百五十円の家賃をもつてこの新世帯の夫婦を迎えたのである。カーライルはこのクロムウエルのごときフレデリック大王のごときまた製造場の煙突のごとき家の中でクロムウエルを著わしフレデリック大王を著わしデイスレリーの周旋しゅうせんにか

かる年給を擯^{しりぞ}けて四角四面に暮したのである。

余は今この四角な家の石階の上に立つて鬼の面のノツカーをコツコツと敲^{たた}く。しばらくすると内から五十恰好^{かつこう}の肥った婆さんが出て来て御這^{おはい}入りと云う。最初から見物人と思つてゐるらしい。婆さんはやがて名簿のようなものを出して御名前をと云う。余は倫敦滞留中四たびこの家に入り四たびこの名簿に余が名を記録した覚えがある。この時は実に余の名の記^{きに}入初^{ゆはじめ}であつた。なるべく丁寧に書くつもりであつたが例に因^よつてはなはだ見苦しい字が出来上つた。前の方を繰りひろげて見ると日本人の姓名は一人もない。して見ると日本人でここへ来たのは余が始めてだたと下らぬ事が嬉しく感ぜられる。婆さんがこちらへと云うから左手の戸をあけて町に向いた部屋に這入る。これは昔し客間であつたそうだ。色々なものが並べてある。壁に画^えやら写真やらがある。大概是カーライル夫婦の肖像のようだ。後ろの部屋にカーライルの意匠に成つたという書棚がある。それに書物が沢山詰まつている。むずかしい本がある。下らぬ本がある。古びた本がある。読めそうもない本がある。そのほかにカーライルの八十の誕生日の記念のために鑄^いたという銀牌^{ぎんぱい}と銅牌^{どうぱい}がある。金牌^{きんぱい}は一つもなかったようだ。すべての牌^{はい}と名のつくものがむやみにかちかちしていつまでも平氣に残つてゐるのを、もううた者の煙のごとき寿命と対照して考え

ると妙な感じがする。それから二階へ上る。ここにまた大きな本棚があつて本が例のごとくいっぱい詰まっている。やはり読めそうもない本、聞いた事のなさそうな本、入りそうもない本が多い。勘定をしたら百三十五部あつた。この部屋も一時は客間になっておつたそうだ。ビスマークがカーライルに送った手紙と普露西^{プロシア}の勲章がある。フレデリック大王伝の御蔭と見える。細君の用いた寝台^{ねだい}がある。すこぶる不器用な飾り^{かざり}気のないものである。案内者はいずれの国でも同じものと見える。先^さつきから婆さんは室内の絵画器具について一々説明を与える。五十年間案内者を専門に修業したものであるまいが非常に熟練したものである。何年何月何日にどうしたとあたかも口から出任^{でまか}せに喋舌^{しゃべ}っているようである。しかもその流暢^{りゅうちやう}な弁舌に抑揚があり節奏^{せつそ}がある。調子が面白いからその方ばかり聴いていると何を言っているのか分らなくなる。始めのうちは聞き返したり問い返したりして見たがしまいには面倒になつたから御前は御前で勝手に口上を述べなさい、わしはわしで自由に見物するからという態度をとつた。婆さんは人が聞こうが聞くまいが口上だけは必ず述べますという風で別段厭^あきた景色もなく怠^{おこた}る様子もなく何年何月何日をやっている。

余は東側の窓から首を出してちよつと近所を見渡した。眼の下に十坪ほどの庭がある。

右も左もまた向うも石の高^{たか}塀^{かべ}で仕切られてその形はやはり四角である。四角はどこまでもこの家の附属物かと思う。カーライルの顔は決して四角ではなかった。彼はむしろ懸^{けん}崖^がの中途が陥落して草原の上に伏しかかったような容^{よう}貌^{ぼう}であつた。細君は上出来の辣^{らっ}蕪^{きよう}のように見受けらるる。今余の案内をしている婆さんはあんばんのごとく丸^まい。

余が婆さんの顔を見てなるほど丸いなと思うとき婆さんはまた何年何月何日を誦^{じゆ}し出した。余は再び窓から首を出した。

カーライル云う。裏の窓より見渡せば見ゆるものは茂る葉の木株^{みど}、碧^{みど}りなる野原、及びその間に点^{てん}綴^{てつ}する勾^{こう}配^{ぱい}の急なる赤き屋根のみ。西風の吹くこの頃の眺^{なが}めはいと晴れやかに心地よし。

余は茂る葉を見ようと思い、青き野を眺^{なが}めようと思うて実は裏の窓から首を出したのである。首はすでに二返^{へん}ばかり出したが青いものも何にも見えぬ。右に家が見える。左^{ひだり}に家が見える。向^{むこう}にも家が見える。その上には鉛^{なまり}色^{いろ}の空が一面に胃病やみのように不^ふ精^{しやう}無^む精^{しやう}に垂れかかっているのみである。余は首を縮めて窓より中へ引き込めた。案内者はまだ何年何月何日の続きを朗らかに読^{どく}誦^{じゆ}している。

カーライルまた云う倫敦^{ロンドン}の方^{かた}を見れば眼に入るものはウエストミンスター・アベールと

セント・ポールズの高塔の頂きのみ。その他幻のごとき殿宇は煤を含む雲の影の去るに任せて隠見す。

「倫敦の方」とはすでに時代後れの話である。今日チエルシーに来て倫敦の方を見るのは家の中に坐つて家の方を見ると同じ理窟で、自分の眼で自分の見当を眺めると云うのと大した差違はない。しかしカーライルは自ら倫敦に住んでいるとは思わなかつたのである。彼は田舎に閑居して都の中央にある大伽藍を遥かに眺めたつもりであつた。余は三度び首を出した。そして彼のいわゆる「倫敦の方」へと視線を延ばした。しかしウエストミンスターも見えぬ、セント・ポールズも見えぬ。数万の家、数十万の人、数百万の物音は余と堂宇との間に立ちつつある、濛いつつある、動きつつある。千八百三十四年のチエルシーと今日のチエルシーとはまるで別物である。余はまた首を引き込めた。婆さんは黙然として余の背後に佇立している。

三階に上る。部屋の間を見つると冷やかにカーライルの寝台が横わっている。青き戸帳が物静かに垂れて空しき臥床の裡は寂然として薄暗い。木は何の木か知らぬが細工はただ無器用で素朴であるというほかに何らの特色もない。その上に身を横えた人の身の上も思ひ合はさる。傍らには彼が平生使用した風呂桶が九鼎のごとく尊げに置かれてある。

風呂桶とはいうもののバケツの大きいものに過ぎぬ。彼がこの大鍋おなべの中で倫敦すすの煤を洗い落したかと思うとますますその人となりが偲しのばれる。ふと首を上げると壁の上に彼が往おうじよう生した時に取ったという漆喰しつくいせい製の面型マスクがある。この顔だなどと思う。この炬燵こたぐら櫓ぐらいの高さの風呂に入はいつてこの質素な寢台の上に寝て四十年間やかましい小言こごんを吐き続けに吐いた顔はこれだなどと思う。婆さんの淀よどみなき口上が電話口で横浜の人の挨拶を聞くように聞える。

宜よろしければ上りましようと思婆さんがいう。余はすでに倫敦ちりの塵と音を遙はるかの下界に残して五重の塔の天辺てっぺんに独坐するような気分がしているのに耳の元で「上りましよう」という催促を受けたから、まだ上があるのかなと不思議に思つた。さあ上ろうと同意する。上れば上るほど怪しい心持が起りそうであるから。

四階へ来た時は縹ひようびよう渺として何事とも知らず嬉しかった。嬉しいというよりはどことなく妙であつた。ここは屋根裏である。天井を見ると左右は低く中央が高く馬の鬣たてがみのごとき形かたちをしてその一番高い背筋せすじを通して硝子張りの明り取りが着いている。このアチツクに洩もれて来る光線は皆頭の上から真直まっすぐに這入はいる。そうしてその頭の上は硝子一枚を隔てて全世界に通ずる大空である。眼に遮さえぎるものは微塵みじんもない。カーライルは自分の経営でこ

の室を作った。作つてこれを書齋とした。書齋としてここに立籠たてこもった。立籠たてこもつて見て始めてわが計画の非なる事を悟った。夏は暑くておりにくく、冬は寒くておりにくい。案内者は朗読的にここまで述べて余を顧かえりみた。真丸まんまるな顔の底に笑の影が見える。余は無言のままうなづく。

カーライルは何のためにこの天に近き一室の経営に苦心したか。彼は彼の文章の示すごとく電光的人であつた。彼の癩癬かんぺきは彼の身边を圍繞いにようして無遠慮に起る音響を無心に聞き流して著作に耽ふけるの余裕を与えなかつたと見える。洋琴ピアノの聲、犬の聲、鶏の聲、鸚鵡おうむの聲、いっさいの聲はことごとく彼の鋭敏なる神経を刺激して懊惱おうのうやむ能あたわざらしめたる極きよくついに彼をして天に最も近く人にもつとも遠ざかれる住居をこの四階の天井裏に求めしめたのである。

彼のエイトキン夫人に与えたる書翰しよかんにいう「此夏なつじゅう中は開け放ちたる窓より聞ゆる物音に悩まされ候事そこのこと一方ひとかたならず色々修繕も試み候えども寸毫すんこうも利目無之夫より篤とくと熟考の末家の真上に二十尺四方の部屋を建築致す事に取極め申候是は壁を二重に致し光線は天井より取り風通しは一種の工夫をもつて差支さしつかえなき様致す仕掛に候えば出来上り候上そうは仮令たとひ天下の鷄共一時に関ときの声を揚げ候とも閉口仕らざる積つもりに御座候そろう」

かくのごとく予期せられたる書齋は二千円の費用にてまずまず思い通りに落成を告げて予期通りの効果を奏したがこれと同時に思い掛けなき障害がまたも主人公の耳辺に起った。なるほど洋琴の音もやみ、犬の声もやみ、鶏の声、鸚鵡の声も案のごとく聞えなくなつたが下層にいるときは考だに及ばなかつた寺の鐘、汽車の笛さては何とも知れず遠きより来る下界の声が呪のごとく彼を追いかけて旧のごとくに彼の神経を苦しめた。

声。英国においてカーライルを苦しめたる声は独逸においてシヨペンハウアを苦しめたる声である。シヨペンハウア云う。「カントは活力論を著せり、余は反つて活力を弔う文を草せんとす。物を打つ音、物を敲く音、物の転がる音は皆活力の濫用にして余はこれのために日々苦痛を受くればなり。音響を聞きて何らの感をも起さざる多数の人我説をきかば笑うべし。されど世に理窟をも感ぜず思想をも感ぜず詩歌をも感ぜず美術をも感ぜざるものあらば、そは正にこの輩なる事を忘るるなかれ。彼らの頭腦の組織は麁獷にして覺り鈍き事その原因たるは疑うべからず」カーライルとシヨペンハウアとは実は十九世紀の好一對である。余がかくのごとく回想しつつあつた時に例の婆さんがどうです下りましようかと促がす。

一層を下るごとに下界に近づくような心持ちがする。冥想の皮が剥げることく感ぜら

る。階段を降り切つて最下の欄干に倚つて通りを眺めた時にはついに依然たる一個の俗人となり了つてしまつた。案内者は平氣な顔をして厨を御覽なさいという。厨は往来よりも下にある。今余が立ちつつある所よりまた五六段の階を下らねばならぬ。これは今案内をしている婆さんの住居になつてゐる。隅に大きな竈がある。婆さんは例の朗読調をもつて「千八百四十四年十月十二日有名なる詩人テニソンが初めてカーライルを訪問した時彼ら兩人はこの竈の前に対坐して互に煙草を煙らすのみにて二時間の間一言も交えなかつたのであります」という。天上に在つて音響を厭いたる彼は地下に入つても沈黙を愛したるものか。

最後に勝手口から庭に案内される。例の四角な平地を見廻して見ると木らしい木、草らしい草は少しも見えぬ。婆さんの話しによると昔は桜もあつた、葡萄もあつた。胡桃もあつたそうだ。カーライルの細君はある年二十五錢ばかりの胡桃を得たそうだ。婆さん云う「庭の東南の隅を去る五尺余の地下にはカーライルの愛犬二口が葬むられております。二口は千八百六十年二月一日に死にました。墓標も当時は存しておりましたが惜しいかなその後取払われました」と中々精しい。

カーライルが麦藁帽を阿弥陀に被つて寝巻姿のまま唧え煙管で逍遙したのはこの

庭園である。夏の最中^{もなか}には蔭深き敷石の上にささやかなる天幕^{テント}を張りその下に机をさえ出して余念もなく述作に従事したのはこの庭園である。星明^{あきら}かなる夜最後^よの一ぷくをのみ終りたる後、彼が空を仰いで「嗚呼^{ああ}余が最後に汝^{なんじ}を見るの時は瞬刻^{のち}の後ならん。全能の神が造れる無辺大の劇場、眼に入る無限、手に触^ふる無限、これもまた我が眉目^{かす}を掠めて去らん。しかして余はついにそを見るを得ざらん。わが力を致せるや虚ならず、知らんと欲するや切なり。しかもわが知識はただかくのごとく微^びなり」と叫んだのもこの庭園である。余は婆さんの労に酬^{むく}ゆるために婆さんの掌^{てのひら}の上に一片^{いっぺん}の銀貨を載^のせた。ありがとうと云う声さえも朗読的であつた。一時間の後倫敦^{ロンドン}の塵^{ちり}と煤^{すす}と車馬の音とチームス河とは力ーライルの家を別世界のごとく遠^{かた}き方へと隔^{へだ}てた。

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年10月27日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：LUNACAT

2000年8月31日公開

2004年2月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

カーライル博物館

夏目漱石

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>